

久保泉工場団地内遺跡

—— 仮称久保泉工場団地造成計画に伴う
埋蔵文化財確認調査報告書 ——

昭和 61 年 3 月

佐賀市教育委員会

序 文

久保泉地区は古くから文化財の宝庫として広く知られていますが、この地に工場団地が建設されることになりました。

工場団地建設計画にあたり、まず埋蔵文化財が「どこに」、「どのくらいの広さで」、「何が」あるかを知る必要があります。そのために事前の確認調査を実施した訳ですが、その結果年代的には弥生時代から中世に及ぶ遺構・遺物が多数検出され、久保泉はやはり文化財の宝庫という感をさらに強くしました。

本書が地元の方々の文化財に対する認識と理解を深めるために御活用いただき保護資料の一助になれば幸甚に存じます。

最後に、この調査にあたり、作物を植えているにもかかわらず、調査に御協力下さいました地元の方々をはじめ、関係各位に深く感謝する次第です。

昭和61年 3 月31日

佐賀市教育委員会 教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は昭和59年に実施した、仮称久保泉工場団地造成に先だつ埋蔵文化財確認調査の報告書である。
2. 調査は佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
3. 工場団地の計画範囲は昭和59年度当時のものである。
4. 遺構の記録は調査員が行った。
5. 遺物の復元は西首金子、原田黎子、鬼崎玲子が行い、実測、トレースは野中須矢子、島京子が行った。
6. 本書の執筆・編集は福田が担当した。

本文目次

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 位置と環境	2
4. 調査の方法と事後処理について	3
5. 発掘調査概要	3

挿図目次

Fig. 1 工場団地予定地内遺跡分布図	2
Fig. 2 トレンチ設定図	4
Fig. 3 遺構密集地区分布図	5～6
Fig. 4 工場団地予定地出土土器実測図	8
Fig. 5 工場団地予定地出土土器実測図	10
Fig. 6 工場団地予定地出土土器実測図	12

図版目次

図版 1・2	トレンチ設定状況
図版 3・4・5	出土遺物写真

1. 調査に至る経過

佐賀市浮揚政策の一つとしてこの久保泉地区に工場団地の計画が提出されたのは昭和58年10月のことであった。当計画の主管課は佐賀市商工観光課であるが、当地区が埋蔵文化財包蔵地であるため、佐賀市教育委員会に埋蔵文化財の取扱いに関する協議の申し出があり、佐賀県教育委員会をまじえて事前の確認調査を実施する旨決定した。

確認調査を実施するとしてもすべての土地が民有地であるため地権者の諒承を得るべく地元説明会も行政内部の協議と併行して実施していった。当該地区に関係する集落は久保泉町上和泉篠木野・草場・徳永、下和泉町下四番、下六番など多数の地域にまたがり、説明会も集落毎に分散して地域の公民館で開催し深夜に及ぶことが度々あった。

説明会の結果、確認調査による農作物、農地の保障については相応の保障がなされるということで8割方の地権者の方より承諾を得、昭和59年11月20日より調査を開始し、翌昭和60年1月28日に終了した。未承諾の土地については今後協議がなされるものとし、とりあえず調査を終了した。

2. 調査の組織

調査主体者 佐賀市教育委員会

調査事務局 佐賀市教育委員会 社会教育課

課 長 中村 弘

課長補佐 喜多 猛（現清掃課長補佐）

係 長 北原 学（現社会教育課長補佐）

事務吏員 福田 義彦

同 本告 敬資

調 査 員 北原 学・福田 義彦

作 業 員 広瀬八重子・後藤美智江・生田美代子・佐尾 啓子・坂本 雪江・小柳ヨシエ

大野 道江・宮地 峯子

調 査 協 力 佐賀市商工観光課（㈲江下建設



Fig. 1 工場団地予定地内遺跡分布図

3. 位置と環境

(1) 地理的環境

佐賀平野は脊振山系から流れ出る諸河川が、風化された花崗岩の砂礫を大量に運搬・堆積して形成されている。山麓部は大粒の砂礫が堆積されて扇状地となりそれらが複雑に重なり合い複合扇状地が点在する。当調査区もそれらの一つに位置し、標高は9m～11mを測る。元来、高燥の土地が多いにもかかわらず土地利用状況は7：3の割で水田が多いが、これは一時期の食糧増産（米）を目的とした畑地の水田転用によるものと考えられる。また、低丘陵と低丘陵の間の「谷」の部分は高湿で水位が高く、このような土地が点在することをもって久保泉（窪泉）の名称が生じたのであろうか。

(2) 歴史的環境

久保泉地区は古くから埋蔵文化財の宝庫として名高いが、実態が把握されているのは丸山遺跡をはじめとする九州横断自動車道建設に伴う調査や数例の学術調査、昭和30～40年代にかけてのミカン園造成に伴う応急的調査などしかなく、しかも金立山南麓の丘陵上の調査というこ

とで土地柄も限定されている。当地区のような平野部では埋蔵文化財の本格的な調査が実施されておらず、わずかに櫟木で甕棺墓や銅戈鋳型発見の報告があるのみである。しかしながら当地区のような平野部でも土器片・石器の散布量は相当なものがあり南麓部に匹敵するほどの遺跡が存在する可能性は非常に高い。実際、櫟木の西部の神埼町利田では甕棺墓や銅鐸型土製品の発見が相次ぎ、当地区にも重要な遺跡が存在していることの傍証となっている。

4. 調査の方法と事後処理について

基本的にはユンボで3×4mの試掘坑を設定することとしていたが、一部地域では地形、作物等の状況から判断して3×4m以下の所もある。埋戻しについては堆積土、床土、耕作土の順に旧状に復し、ユンボバケットやキャタピラで転圧を加えた。地形上、堆積土が多い地点については転圧2回以上実施し、調査後、トラクター等の農耕機器の運転に支障がない様に配慮した。

トレンチ設定地点の地図記入については、2地点の畦畔の交差部分からトレンチまでの距離を計測し地図内に記録した。当書には全体図の中に遺構検出トレンチを記入しているが、市教委には500分の1の地図に、遺構の有無にかかわらずトレンチ設定地点を刻明に記録したものを保管している。

調査の体制としては2班体制をとり、1班の内訳は調査員1人、作業員4人、ユンボ1台となり、調査区北西隅から平行して南下、北上を繰り返した。

5. 発掘調査概要

発掘調査予定地は佐賀県遺跡地図や分布調査で採集した土器片の量からみて広範囲に遺跡があるものと推定されていた。しかし、今回の確認調査が終了してみると遺跡は特定の地点に集中して発見された。全体的にこの調査地を見ると遺跡分布の傾向は西高東低の様相があり、その中でも特に畑地を中心に残存していた。またこれらの遺跡集中部分以外にも、100㎡内におさまるような遺跡部分も点在する。

遺跡の時期は弥生時代から古代、中世にまでおよび出土遺物は甕形土器・鉢形土器・壺形土器・高坏・坏・小皿・石器等多岐にわたる。出土遺構としてはトレンチの規模が小さかったので明確ではないが、確実なものとしては土墳墓・住居址・柱穴群・溝等多数検出した。

今回の確認調査の成果は上記のとおりであるが、上物の関係で未調査部分が数か所に点在するが、その中でも調査区東南隅に位置する山林は重要な遺跡である可能性が高い。ここは踏査しか実施できなかったが、山林内部の幾重にも空堀がめぐらされており、中世館跡のような様相を呈する。地元で聞けば、昔、寺があったとかいいう言伝えがあるらしいが、仮に寺院であったとしても、中世館跡を再利用したのではと思わせる規模の空堀であり、非常に興味深いものがある。ちなみに、文献にはこの寺院は全く登場していない。今後、他の未調査部分同様この山林は慎重に調査する必要があるだろう。

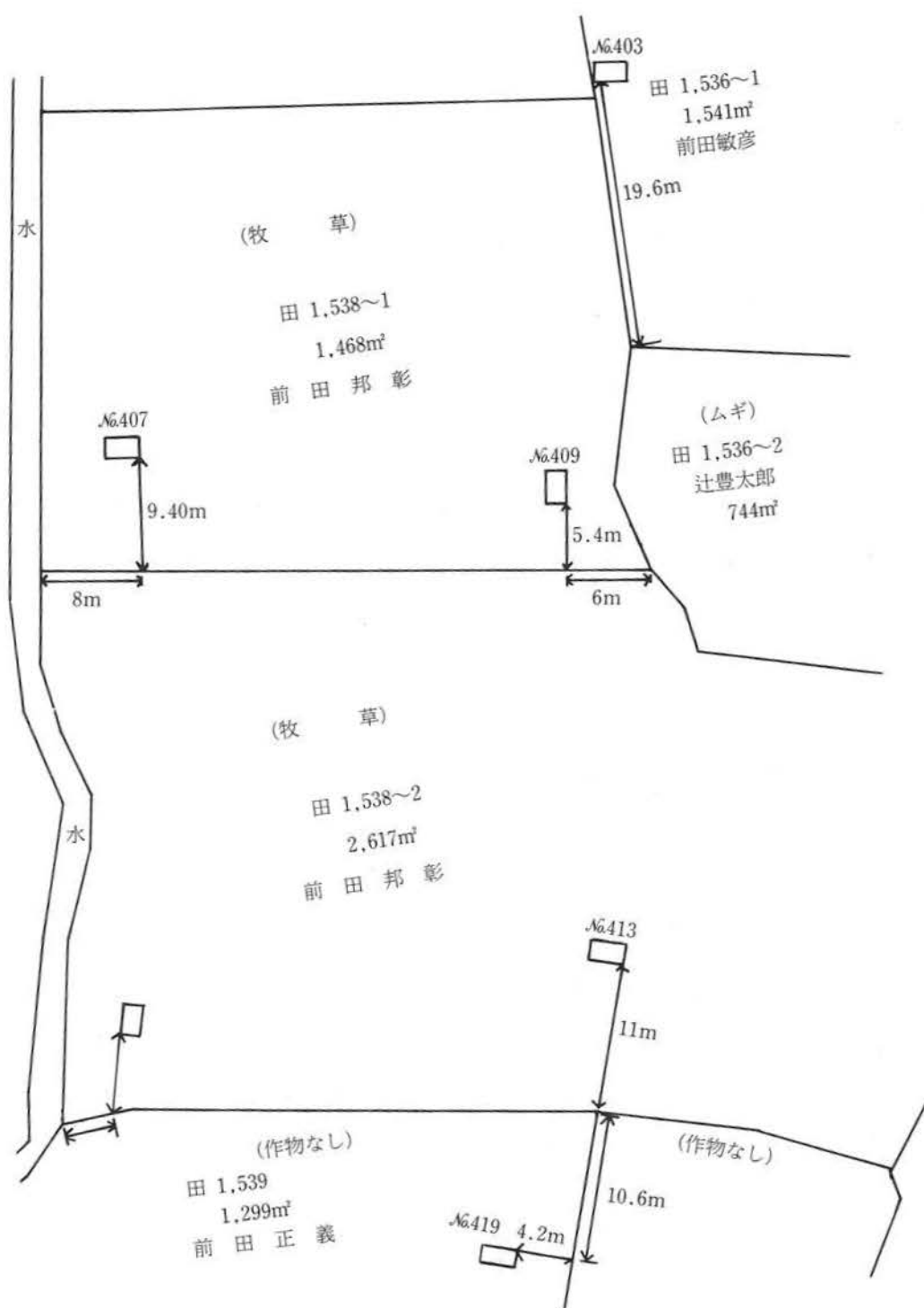


Fig. 2 トレンチ設定図 (S = 1/500)



Fig. 3 遺構密集地区分布図

久保泉工場団地予定地出土土器観察表

(1) 口縁径
(2) 器 高
(3) 底 径

単位 (cm)

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
1	甕 底 部	(1) — (2) 3.2(残) (3) 8.6	わずかにあげ底の平底 で外反しながら立ち上 がる	磨減が激しくわかりに くい	No23
2	甕 底 部	(1) — (2) 3.0(残) (3) 8.7(推)	平底を有する 外反しながら立ち上る	内・外面とも磨減が激 しい	No230
3	甕 底 部	(1) — (2) 3.6(残) (3) 10.7	わずかにあげ底の平底 を有する	内面 ロクロ回転 強 い横ナデのあと底部は 不特定方向へのナデ 外面はロクロ回転 横 ナデ板目あり	No106
4	器 台 受 部	(1)受部径 9.0(推) (2) 9.2(残) (3) —	厚みがあり、クビレは 上位にある	内面 受部ヨコ方向の ナデ 胴部は剥離して 不明 外面 押圧のあとナデ	No22
5	小 壺	(1)擬似口縁 4.1(推) (2) 7.9(残) (3) 丸底	尖り気味の丸底を持つ	内面 ヘラ状工具使用 外面 ハケ目があるが 磨減して一部しか見え ない	No106 残 95%
6	台付鉢	(1) — (2) 7.2(残) (3) —		内外面ともにハケ目調 整であるが磨減が激し く一部しか見えない	No94
7	甕 口縁部	(1) 15.8(推) (2) 7.5(残) (3) —	複合口縁を有し、口縁 部は外反しながら立ち 上がり端部は稜を有す る	内面 ハケナデ 外面 口頸部タタキ 頸部ヨコ方向のナデ 肩部タタキ ハケ目、 顔料塗布の痕跡あり	No102

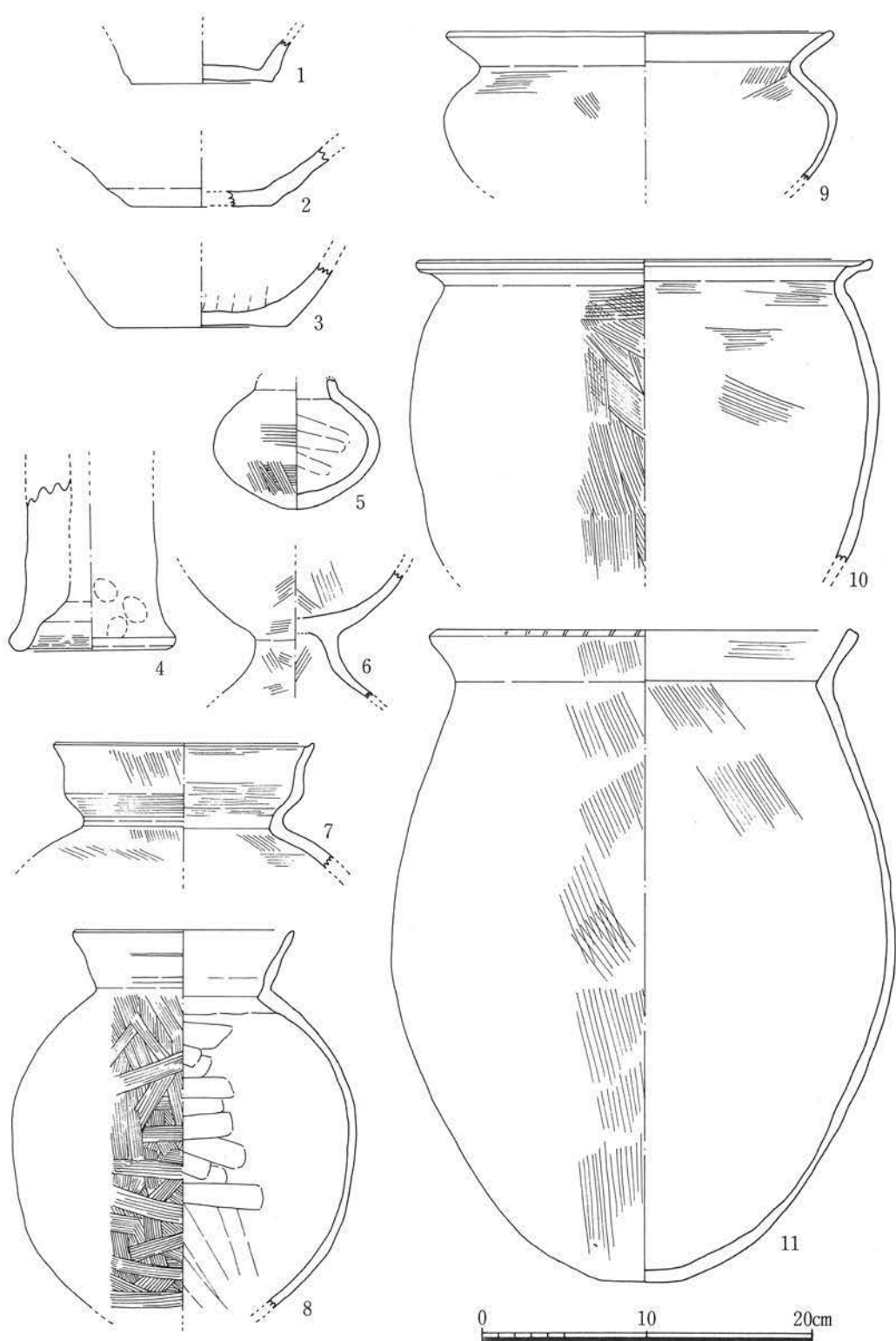


Fig. 4 工場団地予定地出土土器実測図

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
8	壺	(1) 13.4(推) (2) 23.2(残) (3) 丸底(推) (4)最大胴径 21.0	口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる 体部は球状を呈し胴部に最大径を有する 底部は丸底と推定する	内面 ヘラ削りのあとナデ 口縁及び頸部は内外面ともヨコ方向のナデ 外面は胴部全体に不特定方向へハケ目 外面胴部下部に炭化物付着	No106 残 50% 弱
9	壺	(1) 24.0(推) (2) 9.2(残) (3) ——— (4)最大胴径 24.7(推)	口縁部は大きく外反し端部はやや角張る 最大胴径は肩部にある	内面口縁部ヨコ方向のハケナデ 胴部ハケナデ 外面 口縁部ハケ目 胴部ハケナデ	No258
10	甕	(1) 27.5(推) (2) 18.6(残) (3) ———	口縁部は大きく開き内湾気味に立ち上がり、端部は丸味を帯びる	内面 口縁部はヨコ方向のナデ 体部はハケのあとナデによる打ち消し 外面 口縁部ヨコ方向のナデ 体部はナメ方向のハケ 下部はタテ方向のハケ 外面に煤が付着	No22
11	甕	(1) 23.6(推) (2) 39.8 (3) 5.0	丸底に近い平底を有し、口縁はやや外反し、内外頸部に稜を有する 端部は角張っている 最大径は胴部にある	内面 口縁部ヨコナデ 頸部下にナメ方向のナデ 体部はハケ目をナデ消している 外面 口縁部タテ方向のハケ目 体部はややナメ方向のハケ 下部はタテ方向のハケ目	No258 残 60%
12	坏	(1) 14.8(推) (2) 1.45 (3) 10.5(推)	内湾気味に立ち上がり、口唇部で外反する 口唇部は丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向のナデ 右回転糸切り	No167

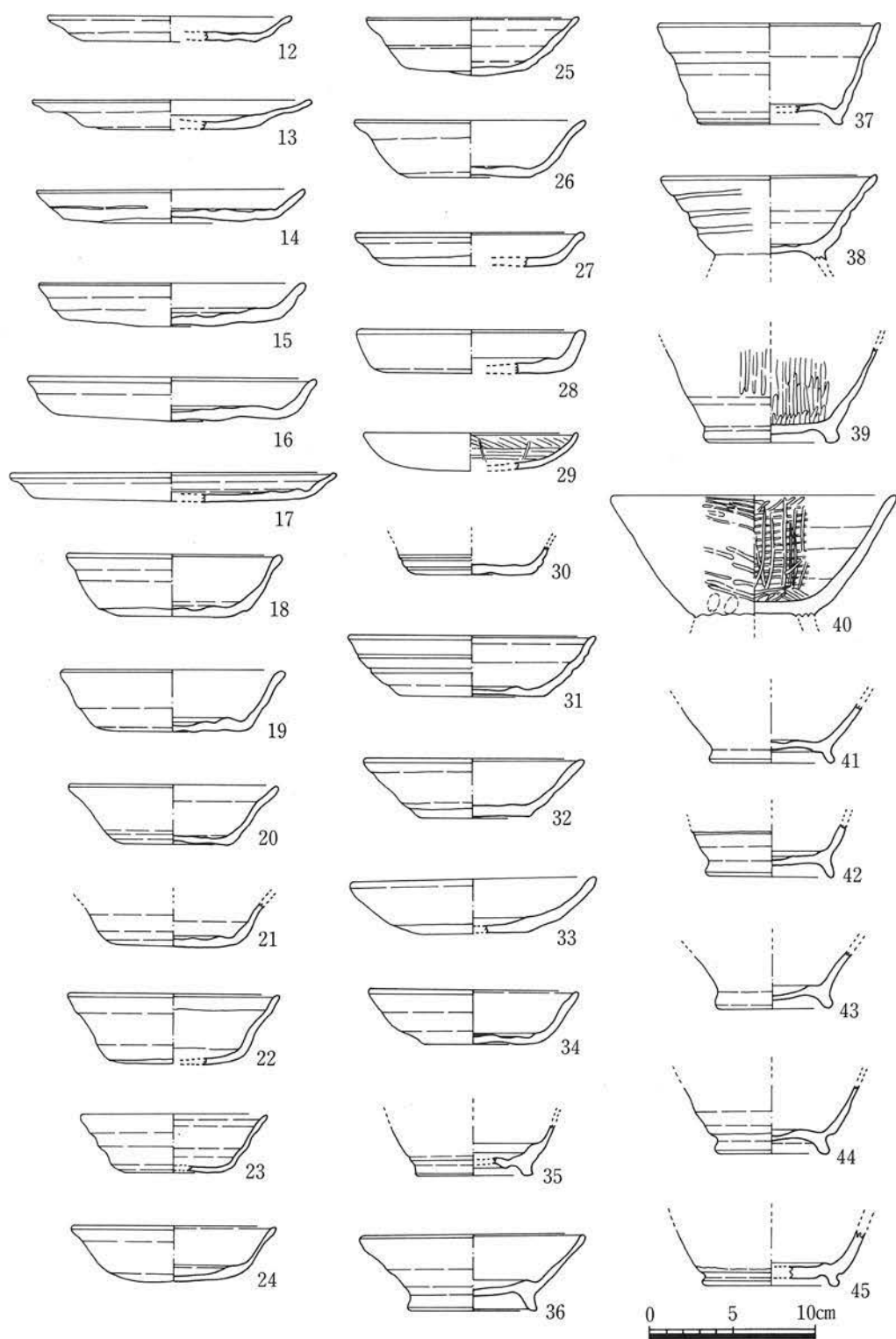


Fig. 5 工場団地予定地出土土器実測図

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
13	坏	(1) 15.0(推) (2) 1.7 (3) 10.5(推)	外反しながら立ち上がる 口唇部わずかに稜 を有する	内外面ともヨコ方向の ナデ 右回転 糸切り	No167
14	坏	(1) 15.9(推) (2) 1.9 (3) 10.8(推)	わずかに外反しながら 立ち上がる 口唇部は 丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向の ナデ 内面見込みに不 定方向のナデ 左回転 糸切り	No173
15	坏	(1) 16.0(推) (2) 2.5 (3) 12.9(推)	わずかに外反しながら 立ち上がる 口唇部は 丸味を帯びる	内面見込み不定方向の ハケ目 体部は内外と もヨコナデ 顔料塗布	No150
16	坏	(1) 17.2(推) (2) 2.6 (3) 14.6(推)	外反しながら立ち上がる 口唇部は稜を有する	内面 強いヨコ方向の ナデ 外面 ヨコ方向のナデ 右回転 糸切り	No167
17	坏	(1) 19.4(推) (2) 1.7 (3) 15.2(推)	外反しながら立ち上がる 口唇部は丸味を帯びる	内外面 ヨコ方向のナ デ 右回転 糸切り	No173
18	坏	(1) 12.7(推) (2) 3.7 (3) 6.8(推)	内湾気味に立ち上がり 口唇部で外反する 口 唇部は丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向の ナデ 右回転 糸切り	No181
19	坏	(1) 13.1(推) (2) 3.7 (3) 7.8(推)	内湾気味に立ち上がる 口唇部は丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向の ナデ 口縁部に炭化物 右回転 糸切り	No181
20	坏	(1) 12.6(推) (2) 3.5 (3) 6.7(推)	内湾気味に立ち上がり 体部上半より外反する 口唇部に稜を有する	内外面ともヨコ方向の ナデ 板目 糸切り	No181
21	坏	(1) — (2) 2.6(残) (3) 6.4	内湾気味に立ち上がり 体部上半より外反する	内外面とも回転ヨコナ デ 糸切り	No181
22	坏	(1) 12.6(推) (2) 4.2 (3) 8.5(推)	内湾気味に立ち上がり 体部下半部より外反す る 口唇部は丸味を帯 びる	内外面ともヨコ方向の ナデ	No167

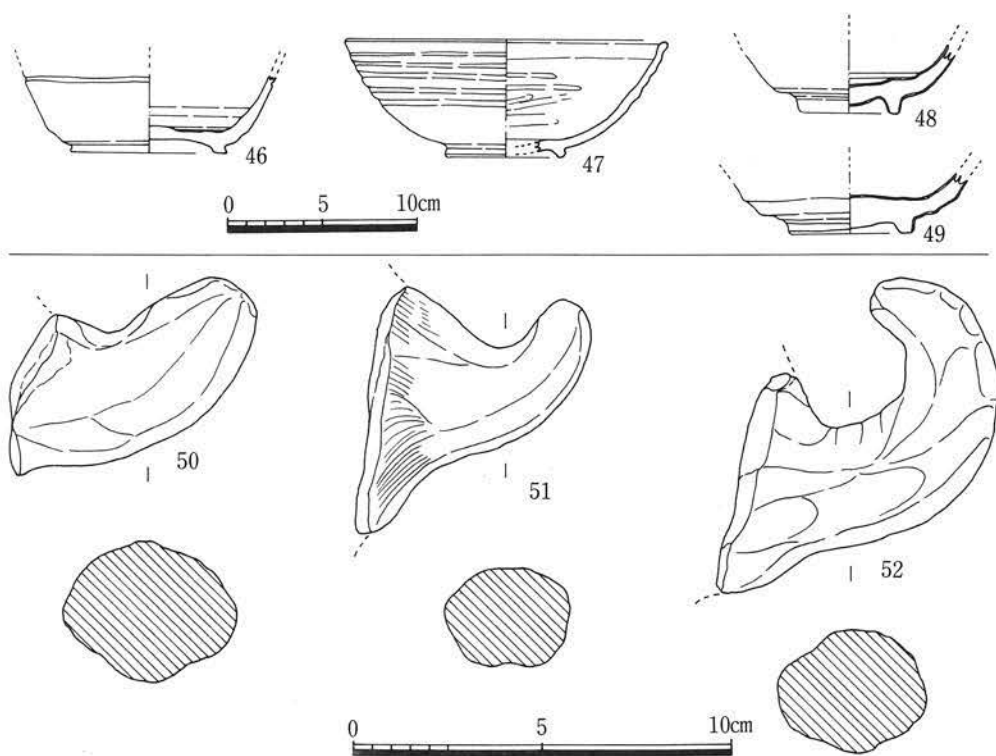


Fig. 6 工場団地予定地出土土器実測図

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
23	坏	(1) 11.6(推) (2) 3.5 (3) 5.8(推)	内湾気味に立ち上がり 体部上半より外反する 口唇部に稜を有する	内外面ともヨコ方向の ナデ 茶褐色の不着物	No181
24	坏	(1) 12.3(推) (2) 3.4 (3) 7.3	内湾気味に立ち上がり 体部上半より外反する 口唇部わずかに稜を有 する	内外面ともヨコ方向の ナデ 板目 糸切り	No167
25	坏	(1) 12.7(推) (2) 3.4 (3) 7.3	内湾気味に立ち上がり 体部上半部より外反す る 口唇部は丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向の ナデ 茶褐色の不着物	No181
26	坏	(1) 14.0(推) (2) 3.4 (3) 7.4(推)	内湾気味に立ち上がる 口唇部で外反する	内外面ともヨコ方向の ナデ 茶褐色の付着物 板目 糸切り	No181
27	坏	(1) 13.6(推) (2) 2.0 (3) 10.1(推)	わずかに内湾気味に立 ち上がり外反する	内面 強い回転ヨコナ デ 外面 ヨコ方向の ナデ 糸切り	No167
28	坏	(1) 13.2(推) (2) 2.7 (3) 11.0(推)	内湾しながらほぼ垂直 に立ち上がり厚みがあ る 口唇部は丸味を帯 びる	内外面ともヨコナデ	No226
29	坏	(1) 12.8(推) (2) 2.4(残) (3) 丸底(推)	内湾しながら立ち上が る 口唇部に稜を有す る	内面 ヘラ状工具によ るハケ目 外面 不定方向のナデ	No258
30	坏	(1) — (2) 1.6(残) (3) 6.8	内湾しながら立ち上が る	内面 ヨコ方向のナデ 外面 ヘラ状工具によ る回転溝	No167
31	坏	(1) 14.7(推) (2) 3.6 (3) 8.8(推)	内湾しながら立ち上が り口唇部で外反する 比較的薄手の坏である	内外面とも回転ヨコナ デ 回転溝 糸切り 板目	No181

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
32	坏	(1) 13.0(推) (2) 3.5 (3) 6.5	わずかに内湾しながら 立ち上がる 口唇部は 丸味を帯びる	内外面ともに回転ヨコ ナデ 底部糸切りのあ とナデ	No181
33	坏	(1) 14.5(推) (2) 3.2 (3) 6.4(推)	内湾しながら立ち上 がる 口縁径に比して底 径が小さい 口唇部は 丸味を帯びる	指頭による回転ヨコナ デ	No26
34	坏	(1) 12.5 (2) 3.2 (3) 6.7	内湾しながら立ち上 がり体部上半から外反す る 口唇部は丸味を帯びる	指頭による回転ヨコナ デ 糸切りのあとナデ	No181
35	坏	(1) — (2) 2.9(残) (3)高台内径 6.1(推) 高台外径 7.1(推)	高台の上から内湾しな がら立ち上がる	内外面とも回転ヨコナ デ 見込みに焼成後穿 孔を外からあける 高 台を後で貼りつける	No167
36	坏	(1) 13.4(推) (2) 3.2 (3)高台内径 6.8(推) 高台外径 7.8(推)	高台は外反する 端部 は角張っている わずかに内湾しながら 立ち上がり体部上半よ り外反する 口唇部は 丸味を帯びる	内外面とも回転ヨコナ デ 外底部板目がある ので高台を後から貼り つけたものと思われる	No181
37	坏	(1) 13.3(推) (2) 6.0 (3)高台内径 8.0(推) 高台外径 8.6(推)	高台と体部のくびれは 少ない 体部はやや外 反しながら立ち上がる 口唇部は丸味を帯び る	内外面とも回転ヨコナ デ 高台を後から貼り つけている	No181
38	坏	(1) 13.0(推) (2) 5.2(残) (3) —	やや内湾しながら立ち 上がり体部上半から外 反する 口唇部は丸味 を帯びる	内外面とも回転ヨコナ デの後回転ヘラケズリ	No167

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
39	坏	(1) — (2) 5.7(残) (3)高台内径 6.7(推) 高台外径 8.1(推)	やや内湾しながら立ち 上がる 高台は厚みがある	内外面ともにタテ方向 のヘラ磨き 高台を後から貼りつけ る	No167
40	坏	(1) 17.1(推) (2) 7.1(残) (3)擬似底径 7.0(推)	やや内湾しながら立ち 上がる 口唇部は丸味 を帯びる 全体に厚味がある	内面はヨコ方向のヘラ 磨きの後タテ方向にヘ ラ磨き 外面 ヨコ方 向のヘラ磨き 高台が はがれた痕がある	No167
41	坏	(1) — (2) 3.4(残) (3) 7.1(推)	やや内湾しながら立ち 上がる	内外面とも回転ヨコナ デ 高台を後から貼り つける	No167
42	坏	(1) — (2) 3.2(残) (3) 7.5	内湾しながら立ち上が る	内外面とも回転ヨコナ デ 回転ヘラ削り 糸切りの後高台をつけ る	No181
43	坏	(1) — (2) 3.3(残) (3) 6.7	わずかに外反しながら 立ち上がる 高台の幅 が広く端部は丸味を帯 びる	内外面とも回転ヨコナ デ 糸切りの後高台を つける	No167
44	坏	(1) — (2) 4.1(残) (3)高台内径 5.4(推) 高台外径 6.6(推)	高台と体部の間はくび れている 体部は内湾 しながら立ち上がる やや薄手である	内外面ともに回転ヨコ ナデ 糸切りの後高台 をつける	No167
45	坏	(1) — (2) 3.2(残) (3)高台内径 6.8(推) 高台外径 8.0(推)	内湾しながら立ち上が る やや厚味がある 高台の幅は広い	内外面ともに回転ヨコ ナデ 高台をあとから つける	No46
46	碗 (須恵器)	(1) — (2) 4.2(残) (3)高台内径 7.0 高台外径 7.8	内湾しながら立ち上が る	内外面とも回転ヨコナ デ ロクロ回転で沈線 を一条	No32

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	トレンチ ナンバー そ の 他
47	碗 (瓦器)	(1) 16.8(推) (2) 6.2 (3)高台内径 5.8(推) 高台外径 6.7(推)	内湾しながら立ち上がる やや薄手である	内面 回転ヨコナデの後一部ヘラ磨きを施す。 外面回転ヨコナデの後 回転ヘラ削りで4～5条の沈線をめぐらす	No167
48	碗 (青磁)	(1) — (2) 3.0(残) (3)高台内径 4.2(推) 高台外径 5.4(推)	内湾しながら立ち上がる	内外面ともに釉がかかり透明度は高く光沢のある緑色である 細い貫入が内外面ともに入っている	No246
49	碗 (青磁)	(1) — (2) 2.9(残) (3)高台内径 5.3(推) 高台外径 6.4(推)	内湾しながら立ち上がる 見込み部分は厚味がある	内外面とも釉がかかり透明度は低く、48に比して光沢は少ない 灰緑色で貫入は大きい 外底部は露胎である	No59
50	取手 (土器)	(1) — (2) — (3) —	幅が広くて短い	手捏風で押圧の後ナデ	No214
51	取手 (土器)	(1) — (2) — (3) —		ヘラ削りの後ハケ目 顔料塗布	No246
52	取手 (土器)	(1) — (2) — (3) —	丸味を持ち細い		No98

あとがきにかえて

確認調査を開始したのは昭和59年の晩秋の11月20日であった。開始地点の調査区北西隅に立ち全域を見まわすと、はたして予定期間内で終了できるだろうかという不安がよぎる。何はともあれ、1か所ずつのトレンチ設定の積み重ねと考え、2班体制で調査を開始した。予想に反して、掘り始めの数か所のトレンチでは遺跡は全く検出しない。少々気が抜けた感があったが、先行している班より遺跡発見の報があり、第1号であるため、調査員・作業員、ユンボオペレーター全員トレンチにかけよる。弥生後期の小形の甕が溝状遺構より出土し、この周辺に相当面積の遺跡が存在することが想定される。

開始から1ヶ月もたつと完全に季節は冬。火が恋しくなるが調査区のまっただ中では薪も見当らず。昼近くに綿雪が激しくなり、昼食場所の確保に思案する。近くに十数mの長さでフラが2列に積まれているのをみつけ、その間で食事を開始した。火の気でもあれば雪まじりの弁当もオツなものだと考え得るであろうが、寒さに耐えるのみで、黙々としてただ箸をうごかす。

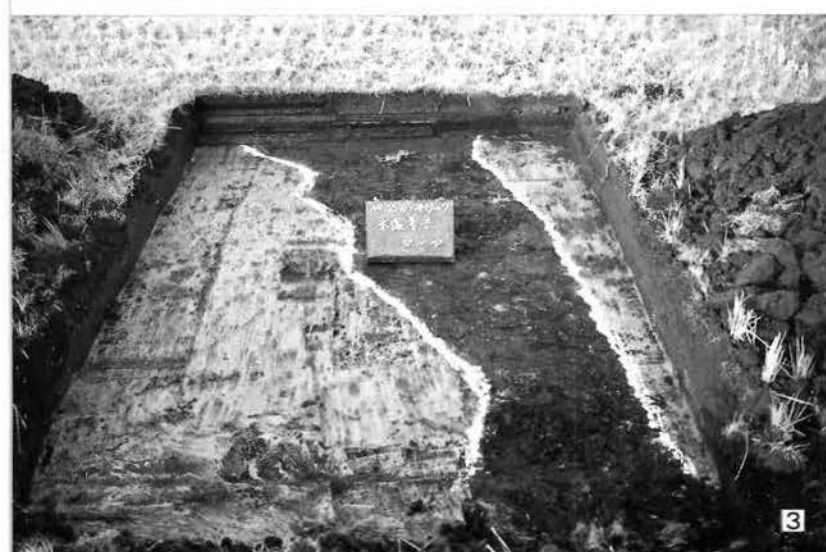
調査もあと少しという所で薪が大量に入手できるようになる。暖は確保できても終日立ちつづけのため腰痛に悩まされるが、あと少しで終了だと自分に言い聞かせ、ついに調査区東南端に至る。

こうして調査は終了したが、私たちの疲労はともかくとして、何よりも地元の人たちの調査に対する協力には感謝にたえない。今回の調査は何も植えられていない所の調査ではなく、苦労して耕作してやっと芽が出たばかりの麦をユンボで踏み荒すのである。相応の保障はなされるが、それにしても地元の人々の気持ちはいかばかりであろうか。とにかく「被害」を極力最小限にとどめるべく努力した。

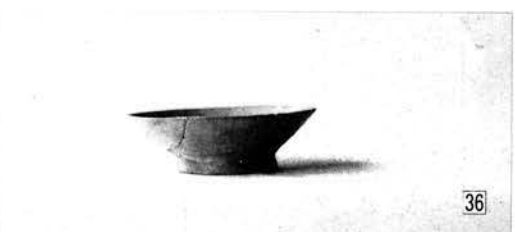
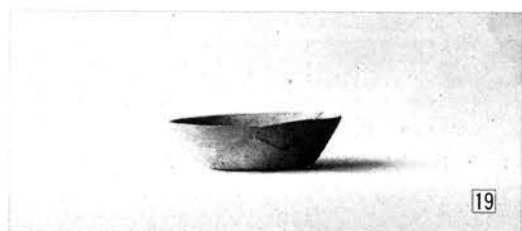
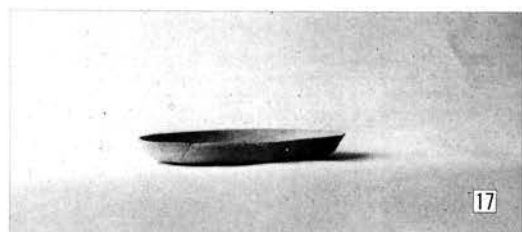
最後に、この小冊子が、地元の人々の文化財に対する、より深い理解と、工場団地建設に際しての資料となれば幸いに思います。

版 図











37



42



39



46



40



48



41



49

久保泉工場団地内遺跡

昭和61年3月

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20